

# Q24 知的障害特別支援学級における自立活動の指導とは

## 1 はじめに

知的障害特別支援学級以外では、肢体不自由等、主たる障害への対応が自立活動の指導となりますが、知的障害特別支援学級では、知的発達に随伴してみられる言語、運動、情緒、行動等、顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態への対応が自立活動の指導となります。

なお、知的障害と併せて弱視や肢体不自由といった障害がある場合には、自立活動の時間を設定して指導(時間による指導)することがありますが、知的障害のみの場合は、日常生活の指導や生活単元学習、作業学習といった、各教科等を合わせた指導の中に位置づけて指導することが基本となります。その場合にも、自立活動について個別の指導計画を作成し、指導の目標や指導内容を明記する必要があります。

また、教育活動全体を通して自立活動の内容を指導することが大切です。

## 2 実態把握の視点

自立活動の指導にあたって実態把握をするときは、知的発達のレベルからみて、言語、運動、情緒、行動などの面で、顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とすることはないか、発達に不均衡(個人内差)はないかを把握することが大切です。

なお、できないことばかりに目を向けるのではなく、できること(発達の伸長面)をpushきえておくことが大切です。

## 3 項目及び目標の設定

### 1 健康の保持

#### (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること

服薬している場合は、嫌がらずに服薬がきちんとできるよう日々、繰り返し指導する。

### 2 心理的な安定

#### (1) 情緒の安定に関すること

集団活動をとるときに、心理的に不安定になる場合は、睡眠、生活のリズム、体調、天気、家庭生活、交友関係などの要因を明らかにし、必要に応じて環境の改善を図る。

#### (2) 状況の理解と変化への対応に関すること

場所や場面の变化により適切な行動がとれない場合は、教師と一緒に活動しながら徐々に慣れるようにする。

### 3 人間関係の形成

#### (3) 自己の理解と行動の調整に関すること

本人が容易にできる活動を設定し、成就感を味わうことができるようにして、徐々に自信を回復しながら、自己の理解を深めることができるようにする。

#### 4 環境の把握

(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること

ものの機能や属性、形、色、音が変化する様子、空間・時間等の概念の形成を図ることによって、それを認知や行動の手掛かりとして活用できるようにする。

#### 5 身体の動き

(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること

両手の協応や目と手の協応の上に、正確さや速さ、持続性などの向上が必要である。さらに、その正確さと速さを維持し、条件が変わっても持続して作業を行うことができるようにする。

#### 6 コミュニケーション

(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること

障害が重度で重複している子どもの場合は、話し言葉によるコミュニケーションにこだわらず、表情や身振り、各種の機器などを用いて、意思のやりとりが行えるようにする。

(3) 言語の形成と活用に関すること

話し言葉を用いることができず、限られた音声しか出せない場合には、掛け声や擬音・擬声語等を遊びや学習、生活の中に取り入れて、自発的な発声・発語を促すようにすることが求められる。

(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

障害による経験の不足などを踏まえ、相手や状況に応じて、適切なコミュニケーション手段を選択して伝えたりすることや、自分が受け止めた内容に誤りがないかどうかを確かめたりすることなど、主体的にコミュニケーションの方法等を工夫することが必要である。

以上、例示をしましたが、子どもたちの実態により適切に項目を選定し、それらを相互に関連付けて具体的な指導内容を設定します。

### 3 人間関係の形成

#### (3) 自己の理解と行動の調整に関すること

ADHDのある子どもは、状況にそぐわない行動をすることがあるために友達に受け入れられず、集団参加が難しい。状況に合わせて行動することが自分は不得意であることを理解したり、行動する前に周囲の状況を観察したり、状況を理解するゆとりをもつ態度を身に付けるよう指導する。その際にはロールプレイのように、できるだけ具体的な状況を設定して指導する。

経験が少ないことや課題に取り組んでもできなかった経験などから、自己に肯定的な感情をもつことができない状態に陥っている場合、活動が消極的になったり、自暴自棄になったりすることがあるので、早期から成就感を味わうことができるような活動を設定し、自己を肯定的にとらえる感情を高められるようにする。

### 5 身体の動き

#### (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること

ADHDのある子どもは、一連の作業において最後まで注意の集中が続かないことがある。作業工程を分割し、一つ一つの工程に短時間集中することから始めて、徐々に作業に集中できる時間を長くするようにする。